

解説：小宮正安

第1部【異界への旅】

18世紀後半から19世紀初頭にかけて、ヨーロッパを席卷したトルコ趣味。オスマン帝国軍によるウィーン攻略事件など、トルコに関しては恐ろしいイメージとともに、ヨーロッパとは異なるアラブ世界の象徴として大きな憧れも寄せられていた。

ウェーバー（1786-1826）が、1810年から11年にかけて作曲した歌劇（というよりも台詞の入った歌芝居）《アブ・ハッサン》もその1つ。「アラビアン・ナイト」の別名で知られる『千夜一夜物語』に登場するエピソードを基に作られた。序曲からして、当時のヨーロッパの人間が編み出した、トルコ風・アラブ風のエキゾチックな響きに満ちている。

そんな《アブ・ハッサン》の先輩格ともいえるのが、モーツァルト（1756-91）が1782年に作った、こちらも歌劇／歌芝居の《後宮からの誘拐》。トルコのハーレムを舞台に繰り広げられる冒険と許しの物語は、モーツァルトならではの煌めく音楽と相まって大評判となった結果、当時流行りの「ハルモニウムジーク」という管楽アンサンブルのためにも編曲された。

モーツァルトが故郷ザルツブルクの宮廷に勤めていた頃と同僚音楽家であり、ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）の弟でもあったミヒヤエル・ハイドン（1737-1806）。彼もまた、管楽アンサンブルのために、《トルコ行進曲》を書いている。

そんなM.ハイドンの晩年、父親が率いる巡回劇団とともにザルツブルクへやって来たのが、少年時代のウェーバーだった。幼いころから音楽的な才能を豊かに具えていた彼は、M.ハイドンにも師事するなどして、急速にその才能を開花させた。1798年に作られた《6つのフゲッタ》もそうした時期の作品で、栄（は）えある作品番号「op.1」を与えられている。

モーツァルトは後半生、故郷のザルツブルクを去ってウィーンで活躍するが（《後宮からの誘拐》もまさにその時代に書かれた）、1783年にただ一度だけ、ザルツブルクに里帰りの旅をおこなう。この時、急病のためザルツブルク宮廷から頼まれていた曲を作れなくなった旧友M.ハイドンのために、モーツァルトがこっそり彼に代わって書いたのが、《ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲》。

モーツァルトは生涯の多くを旅路に過ごし、自身の才能を各地で披露するだけでなく、様々な滞在先で得た音楽体験を自身の創作にも反映していった。とりわけ、3度にわたっておこなわれたイタリア旅行は、彼に大きな影響を与え、その余韻の中で1772年に作られた3曲の《ディヴェルティメント》の1つが《ディヴェルティメントへ長調》だ。

イタリア旅行をおこなう中、モーツァルトはボローニャで、当時を代表する音楽理論家であり作曲家のマルティーニ（1706-84）と知り合い、様々なことを学んだ。《鍵盤楽器のためのソナタへ長調》も、そんなマルティーニが書いた（そして現在ではほとんど忘れられてしまった）作品の1つである。

1783年のザルツブルクへの里帰りの帰途、モーツァルトはドナウ河沿いの大都市リンツに立ち寄る。そこで催された演奏会のために、急きょ作曲された（と言われている）のが「交響曲第36番《リンツ》」。本日は、モーツァルトの弟子だったフンメル（1778-1837）による、室内楽編曲版で演奏される。

第2部【愛への旅】

18世紀後半から19世紀初頭という変革の時期には、特に男女の間における愛の形も変わっていった。従来は結婚が家同士の結びつきのための制度だったため、結婚と恋愛は別物だったが、個人の意思による結婚が可能になった結果、恋愛から結婚へという流れが生まれた。

そうした中、ウェーバー（1786-1826）が1825年から26年にかけて作曲した《オペロン》は、ドイツの文学者ヴィーラント（1733-1813）の同名の叙事詩や、シェイクスピア（1564-1616）の戯曲『真夏の夜の夢』『テンペスト』を基に作られた歌劇。妖精王のオペロンが、「男女の心変わり」について妻と口論になるものの、最後には和解するというストーリーを基に、序曲は劇中のハイライトを成す楽曲から構成されている。

モーツァルト（1756-91）は、故郷ザルツブルクでの宮仕えに嫌気がさし、1777年から79年にかけてヨーロッパ各地へ求職の旅へ出かけた。その途上立ち寄ったマンハイムで、彼は歌手の卵だったアロイジア・ウェーバー（c.1760-1839）に夢中になり、1778年、彼女のために超絶技巧の作品を書く。それこそが「私は求めません 不滅の神々よ」であり、グルック（1714-87）のオペラ《アルチェステ》のために、カルツァベージ（1714-95）が書いたテキストが基になっている。

アロイジアとの恋が結局実ることはなかったものの、やがてウィーンを本拠地としたモーツァルトは彼女の妹のコンスタンツェ（1762-1842）と交際を始め、結婚する。そうした中、家族で、あるいは気の置けない友人たちと歌うべく、彼は自ら作詞も手掛け、プライベートな声楽曲を幾つも生み出した。「ちっちゃなりボン」もその1つで、妻コンスタンツェと、友人のジャカン（1767-92）のために書かれたと思われる喜劇的な三重唱だ。

ところで、アロイジアやコンスタンツェの父親であるフリードリッヒ・ウェーバー（1733-79）には、フランツ（1734-1812）という弟がいた。フランツは、生涯2度結婚しており、2度目の結婚から生まれたのが本日の演奏会の1人であるカール・マリア（以下「ウェーバー」と記載）、1度目の結婚から生まれたのがエドムント（1766-1830）だ（というわけでモーツァルトとウェーバーの関係は、年の離れた義理の従兄弟ということになる）。そんなウェーバーにとって異母兄となるエドムントも音楽家としてドイツ各地で活躍し、《3つの弦楽四重奏曲》などの音楽作品も手掛けている。

ウェーバーは1817年、女優で歌手のカロリーネ（1794-1852）と結婚する。そしてその2年後に書かれ、彼女に献呈されたのが「舞踏への勧誘」。民衆の粗野な舞踊音楽と見なされてきたワルツを、芸術に昇華させたパイオニア的作品となっている。その1年前にあたる1818年に作られたのが、合唱曲《自然と愛》。ウェーバーと同時代人のドイツの詩人であるキント（1768-1843）（キントは歌劇《魔弾の射手》の台本も手掛けた）のテキストに基づく。

モーツァルトの妻となったコンスタンツェは、アロイジアほどの傑出した歌手ではなかったものの、かなりの歌唱力を具えていた。そんな彼女が、楽譜の読解を深め、音楽の能力をより高められるよう、モーツァルトは結婚後間もなく、いわゆる《ソルフェージュ》を作る。なおその中に出てくる「アダージョ」は、1782年から83年にかけて彼が手掛けた（ただし、おそらく初演の計画が潰えたため未完のまま残された）《ミサ曲 ハ短調》の第1曲「キリエ」のソプラノ独唱部分とそっくり重なっている。

第3部 【新時代への旅】

1789年に勃発したフランス革命に見られるように、18世紀後半から19世紀初頭にかけては、変革を求める激しい潮流と、それに伴う混乱、さらにはそうした新たな動きを押しつぶそうとする保守反動の力が激しく入れ替わった時代であった。

ウェーバー（1786-1826）が、詩人、劇作家のキント（1768-1843）と組んで1821年に初演した歌劇《魔弾の射手》も、そうした時代を端的に映し出した作品の1つ。ドイツ語で書かれたテキストを基に、人間のどろどろとした情念や、新たな世界を求める切実な願望など、ドイツ・ロマンティック・オペラの嚆矢とも言われる作品である。なお本日は、音楽家でもあり楽譜出版業者としても活躍したディアベリ（1781-1858）によるギター用の編曲版で「序曲」を取り上げる。

モーツァルト（1756-91）最晩年の傑作歌劇であり、友愛結社フリーメーソンの思想を基に、新たな時代への希望を謳い上げた《魔笛》。この作品の誕生に大きく関わり、台本の執筆、出演までおこなったのが、俳優兼歌手兼台本作者兼興行師のシカネーダー（1751-1812）である。そんなシカネーダーの多彩な顔を反映した作品の1つが、おそらくは彼が作詞作曲を1人で手掛けた《4つのコミカルな三重唱》。今回はその中から、いちやつくカップルを物陰から覗く男の反応を描いた「暗いあずまやへ行きましょう」を取り上げる。

1818年にウェーバーが作った《8つの民謡》所収の「おいおいなんてまぶしい月明かり！」も、フラれた男の胸の内を皮肉交じりに描いたコミカルな1曲。ドイツ語で書かれた民謡をテキストとすることで、古来分裂状態にあったドイツを統一しようとする、当時の新たな政治的動きにも呼応したものとなっている。

そんなウェーバーの政治性が端的に現れたのが、1814年に作曲された《豎琴と剣》。ドイツの詩人ケルナー（1791-1813）の書いた、同名の詩集をテキストにしている。なおケルナーは、革命精神をヨーロッパに広めることを錦の御旗に掲げ、ドイツ地方に進軍して来たナポレオン（1769-1821）の軍勢と闘って落命したこともあって、ドイツの独立と自由を謳った愛国的詩人として有名だった。

そんな《豎琴と剣》には、やはりウェーバーと同時代を生き、愛国的な政治心に燃えていたシューベルト（1797-1828）も曲を付けている。1815年に作曲された《リュッツォウの勇壮な狩》もその1つだが、同じテキストをウェーバーが作曲した作品のほうが、その後、はるかに有名になった。

先述したように、モーツァルトが最晩年の1791年に作曲した歌劇（というよりも台詞の入った歌芝居）《魔笛》には、「おお、イシスとオシリスよ」をはじめ、フリーメーソンの儀式や集会を彷彿とさせるナンバーが幾つか登場する。しかも《魔笛》は大ヒット作となったため、この作品をプロデュースしたシカネーダーは、自分が再び台本を書いて、続編を上演することを思いつく。こうして1798年に生まれたのが、ヴィンター（1754-1825）作曲の歌劇《迷宮》。内容は文字通り《魔笛》の後日譚で、ここにもフリーメーソンの集会を踏まえた「パミーナのために祈る必要はない」などのナンバーが登場する。

《魔笛》初演後、モーツァルトが公の場に最後に姿を現わしたのが、フリーメーソンの新たな集会場の開場式だった。それにあたって作曲されたのが、小カンタータ《われらが喜びを高らかに告げよ》である。モーツァルト自身、人間の平等を謳い新たな時代の価値観を打ち立てようとしたフリーメーソンのために幾つも曲を書いているが、その掉尾を飾る、希望と躍動感に満ちあふれた作品に他ならない。